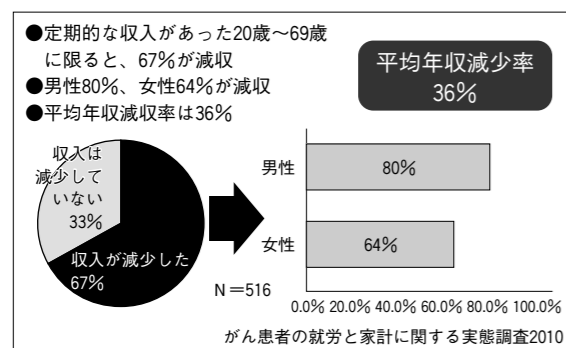


図表1 がん罹患による収入の変化



「がん特約を付帯するか、単体のがん保険に加入するかで悩んでいる」

医療保険への加入を検討していますが、同時にがんの保障も考えています。医療保険とがん保険について調べた結果、医療保険に特約でがん保障を付帯することもでき、そのほうが保険料が安くなると聞きました。医療保険とがん保険にそれぞれ単体で加入する場合と、医療保険の特約でがん保障を付帯する場合と、どちらがよいのでしょうか？
(Hさん、35歳、男性)



基本的には別々の加入を検討されるほうがよいでしょう。医療保険に特約を付帯する加入スタイルは保険料を安くできるケースもありますが、主契約である医療保険の保障額を基準にがん保障を設定しますので、保障設定の自由度という面からは制約を受けることがあります。また、医療保険の見直しや解約を検討する際に、がん特約も影響を受けることとなります。がん治療の在り方は、今後とも変化していくと考えられるため、治療環境にあわせたがん保障の見直しの可能性を確保しておくことも大切だと考えます。



加藤勝久
株式会社総合相談センター
CFP®

広告代理店、外資系生命保険会社を経て現職。キャッシュフロー分析に基づくライフプラン設計・資産運用・生損保設計の相談業務のほか、セミナー講師・執筆等に従事。

がん罹患時の資金ニーズがどこにあるかを明確に！

がんに対する保障を準備できる保険商品には、医療保険、がん保険、三大疾病保険などがあり、医療保険に付帯する特約も、複数の生命保険会社、損害保険会社から販売されている。

「医療保険」は病気やケガによる入院と手術に対する保険で、がん治療のための入院・手術についても給付金の支払対象となる。

「がん保険」は保障対象を「がん」に絞った保険で、がん治療のための入院・手術のほか、診断時の一時金や通院なども保障する保険だ。「三大疾病保険」は、がん、急性心筋梗塞、脳卒中などの三大疾病

で所定の状態に該当した場合を保障するほか、保険期間内に死亡した場合でも同額の保険金を受け取れる。また、解約返戻金があるため貯蓄機能も備えているといえる。

他には、がん治療時の収入減少を補填することを目的とした「がん収入保障保険」や「三大疾病病収入保障保険」といった商品も一部の保険会社から販売されている。

一方、医療保険に付帯できるがん特約としては、がん入院時の上

乗せ保障としての「がん入院特約」をはじめ「がん診断一時金」「がん通院特約」「抗がん剤特約」などが代表的だ。

このように商品、特約に様々な選択肢があると、顧客に迷いが生じるのは当然のことと言える。そこでFPとしては、がん罹患時に顧客が確保したいと考える資金ニーズがどこにあるのかを綿密にヒアリングしていくことを行動の第一としたい。

単体のがん保険での保障か、特約での保障かといった「手段」を検討する前に、顧客の真のニーズ、保障の「目的」について、しっかりとヒアリングすることが最適な保険提案の根幹となるわけだ。

多くの顧客が、がん罹患時に持つ資金ニーズとして「治療費用の

確保」があると考えますが、「収入減少」や「毎月のローンの支払い」などに不安を抱えている顧客も少なくない。

2010年に実施されたアンケート調査(図表1)によると、定期的な収入があった20～69歳のがん患者のうち、約67%が年収の減少を経験している(平均年収減少率36%)。このようながんの罹患経験がある方の実態データを顧客に届けることで、潜在的な資金ニーズを喚起することにもなるだろう。がん罹患によって発生するリスクは決して治療費に限られないことにも注意を払いたい。

加入スタイル別の長所・短所も情報提供を

次に、具体的な保障手段につい

て検討に入っていくわけだが、その前に今回の質問で聞かれている「医療保険+がん特約」と「医療保険+がん保険」について触れておきたい。

医療保険にがん特約を付帯するメリットとしてよく挙げられるのは、それぞれ単体で加入するよりも保険料を安く抑えられる点だ。

近年は、がんと診断された場合に支払われる「診断給付金」を重視し、この給付を確保することで、がんへの経済的な備えとする傾向にある。

ところが、多くのがん保険は、がん入院給付金が主契約となっており、その特約として診断一時金を付帯する。そのため、医療保険とがん保険を別々に加入すると、がんによる入院時には、医療保険